

多田謡子

反権力人権基金

News

No.7

2013/06/15

発行・多田謡子反権力人権基金運営委員会

<http://tadayoko.net>

2012年12月15日

第24回受賞発表会を開催しました



夭折した故多田謡子弁護士の遺産をもとに出発した多田謡子反権力人権基金は、2012年12月15日、東京・お茶の水の連合会館で第24回多田謡子反権力人権賞受賞発表会を開催しました。発表会では選考経過を報告した後、受賞者である、松沢弘さん、根本がんさん、相沢一正さん、神田香織さんから講演を受け、基金より多田謡子の著作「わたしの敵が見えてきた」と賞金20万円が各受賞者に贈られました。その後、同じ会場で恒例のパーティが行われました。

一生をかけて、巨大なマスコミ資本と闘い続けている松沢さん、巨大原発と闘い続けている根本さんと相沢さん、闘い続ける人々の側に立ち続け、講談で社会に訴え続けている神田さんのお話は、いずれも、翌12月16日の総選挙で自民党・公明党の大

勝が予想される困難な状況下、相手がいかに大きな権力であろうとも不正や嘘から目をそらすことなく、人が闘い続けることが可能なことを教えるものでした。(詳細は2,3面)

安倍政権は、弱者への保護政策を削減し、強い者がより強く弱い者がより弱くなり、社会に分断と抗争を拡大する新自由主義を推し進めることで「成長」を達成しようとしています。橋下大阪市長は「慰安婦制度が必要だったことは誰でもわかる」という暴言によって、謝罪と正義の実現を求める女性たちの心を踏みにじり、世界中からの批判を浴びても居直り続けています。

闘い続けるすべての人々に心を寄せて、多田基金は12月15日、第25回受賞発表会を開催します。受賞者推薦、受賞発表会への参加をよびかけます。

多田基金は継続のためのカンパを呼びかけています。

第24回受賞発表会

2012年12月15日 連合会館（東京・お茶の水）

松沢弘さん

（フジサンケイグループの
合理化政策、労働組合潰しとの闘い）



松沢弘さんは高校生時代から社会的運動に参加し、60年代半ばの大学闘争をへて産経新聞グループに入社しました。ご夫人、ご子息とともに受賞発表会に参加して下さった松沢さんは、中学校の卒業式でベトナム反戦を訴えた多田謡子たちの経歴紹介を懐かしい気持ちで聞いたと前置きしてから報告をはじめました。

学生運動を経験した先輩記者の呼びかけにこたえて、フジサンケイグループと癒着する産経労組のなかで、闘う労働組合をめざすグループに参加して23年間闘い続けた松沢さんは、1994年、反リストラ産経労を結成して委員長に就任したところ、日本工業新聞の論説委員から千葉支局への配置転換を命じられ、その8ヶ月後、理由も示されずに懲戒解雇されました。以来、19年間にわたってフジサンケイグループと闘い続けています。

松沢さんは、大学闘争の中で見た教師たちの醜い姿や、美しい言葉を書き連ねるが、自分たちはいつも安全圏にいる新聞記者たちの姿を見ながら、そうした人間にはなるまいと生きてきたと述べました。そして、松沢さんを闘いに誘った先輩をはじめ、ほとんどの者が会社側についてしまった中でも闘い続けてきた経験を、人間がただ経済的人間として、利益を極大化するためにのみ生きることを強いられる現代社会を批判して、人間の全可能性を復権することを主張したフランスの作家、尊敬するポール・ニザンの言葉を引用しながら話しました。

現代社会で、ジャーナリズムは他の産業とまったく同じように、情報・娯楽・言説を「商品」として、売れるかどうか、利益を生み出すかどうかだけで計る商売になっています。松沢さんは、ジャーナリストは取材対象には詳しくなるが、自分の足もと、自分の会社がどのような存在なのかを問うことを忘れていているとして、働く者の利益と本当のことを書く権利を守るために、ジャーナリストは自分の会社と闘

う観点を持たなければならないと話しました。

2012年10月25日、東京高裁は、「産経労組を守り、反リストラ産経労をつぶすために松沢に配転を命じたうえで、懲戒解雇した」などという元会社幹部の証言は「信用できる」としながらも、不当労働行為はなかったという判決を出しました。松沢さんは、最高裁の顔色をうかがい、「白く塗りたる墓のように形式と外面のみ美しく内は災いと偽善に満ちた」（マタイ伝より）判決を認めず、11月7日、最高裁に上告して闘い続けています。

裁判を支え続けてくれた故日隅一雄弁護士や仲間たちとともに、どこまでも闘って行きたい、ジャーナリズムをまともに戻すため頑張っていきたい、そして多田謡子反権力人権賞の記事が、マスコミで堂々と報道されるような、そんな日が来ることを求めて闘い続けたいと述べました。

根本がんさんと相沢一正さん

（東海村での反原発闘争）



根本がんさんは、晴れがましいところは嫌いで、できれば辞退したかったのだが…、と話をはじめました。何もしていません、ただ50年間という長いあいだ、ずるがしこい権力にやられないよう、おしりにくっつきながら闘ってきましたと述べました。

最初一人の反対の声からはじまった漁民による東海原発反対運動は、その後示談へとねじまげられていきましたが、根本さんたちは反対を貫き、多くの人々の協力を得る中で、東海第二原発の認可取り消し訴訟へと闘いを進めていきました。その中で、闘いはただ原発だけを問題にするのではなく、再処理施設、貯蔵施設、燃料輸送など、多くの問題と向き合っていかなければなりませんでした。

裁判のなかで、国は持っている資料ももっていないと嘘をつき、背広を脱いで麦わら帽子をかぶり、夜陰に紛れて切り崩しを計るようなこともしましたが、公安による尾行や拉致のようなこともありました。まっすぐ進むしかないという気持ちで闘ってきました。

福島原発事故を経た中で、仲間から「俺たちは負けた」という声が上がったが、根本さんは、私は負けたとは思っていない、しかし、解決しなければならぬ問題が続いている以上、これからもまだまだ闘い続けていかざるを得ないと述べました。



相沢一正さんは、私たちの活動は全国各地で闘い続けてきた地域からの運動の一つに過ぎない、それを、良心的な弁護士や学者に支えられて頑張ってきたのだと述べ、さらに、全国で闘いに立ち上がった先輩たちに支えられてもいたのだと述べました。

そして、東海第二原発の地鎮祭で会社の責任者が「原発の安全性は運転しながら確かめていきます」と述べたこと、それを聞いて、東海村の住民はモルモットかという怒りが沸いたこと、それが今日まで闘う確信につながったと話しました。以来、東海第二原発の設置許可取り消し訴訟を31年間闘い、最終的に2003年、最高裁によって不当にも門前払いで退けられたこと、また、JCOの臨界事故ではたくさんの人々に健康被害を出したにもかかわらず、国が被害を否定する見解を出し、JCOが補償を拒否したことに対して、野菜には補償があったのに人間にはない、人間は野菜以下に扱われていると訴えて裁判を闘ってきたと述べました。

相沢さんは、3.11事故はまさに原発と原爆がうり二つの双子児であることを明らかにした、原子力の平和利用はあり得ないことを示したとして、人類は原子力とはけっして共存できない、今度こそ運動を後退させずに原発の廃止をめざそうと訴えました。

神田香織さん

(講談で社会問題を訴える活動)



神田香織さんは大手マスコミが翌16日の総選挙で自民党・公明党大勝の予想を流しているが、どんな結果でも私たちは闘い続けなければならない、原発の廃止はイデオロギーの問題ではなく、一人一人の命のかかった問題だからだと話をはじめました。

俳優になることをめざして上京し、講談師として修行した神田さんは、サイパン島で見た戦車の残骸から戦争の悲惨さを知って勉強をはじめました。戦

争と原爆に向き合い、明るい希望を持って生きた少年を描いた漫画「はだしのゲン」に出会い、講談「はだしのゲン」や「チェルノブイリの祈り」などを演じてきました。

神田さんは、自身のふるさと福島で原発事故が起きて16万人が避難している中で、NPO法人「福島支援・人と文化ネットワーク」を作り、リフレッシュハウスに被災した子供たちを招くなどの活動をしています。チェルノブイリでは子供たちを守るため、汚染されていない保養地への定期的な招待が実施されているのに、今、福島では「安全だ、安全だ」という宣伝だけが横行し、「復興のために福島の野菜を食べましょう」というキャンペーンまで行われていると述べました。そして、国や電力会社はチェルノブイリの経験から何も学ぼうとしていない、電力会社の社員はただ「安全だ」と繰り返すだけで、汚染された地で人々がどれだけ不安を抱えて生きているのか、避難した人と残った人の間が分断され、人々がどれだけ苦悩しながら生きているのかなど、考えようとしないう、自分たちの給料のためには、田舎の人の生活など考える必要はないと思っているのではないかと述べました。

神田さんは、原爆・原発との闘いだけでなく、米軍機の墜落で命を奪われた人々、国鉄分割民営化で不当解雇された人々など、理不尽な状況に置かれた人々の側に立つ講談をめざしてきた、気がついていないのに、気がつかないふりをしてはいけぬ。それは、そうしたことが結局自分自身の身に降りかかって来るからだと述べました。

そして、今回、社会問題を訴える講談の活動、社会派講談師の後進を育てるための「講談サロン香織クラブ」の活動、福島の人々を支援するNPO法人の活動の3つの点で受賞できたことは大変嬉しい、明るく元気に弁護活動をした多田謡子のようにこれからも頑張っていきたいと述べました。お話の後、講談サロン香織クラブの皆さんが登壇し、「江戸しりとり」を披露してくださり、大変楽しく盛り上がりました。

(講談サロン香織クラブの皆さん)



第25回多田謡子反権力人権賞候補者推薦のお願い

2013年6月

多田謡子反権力人権基金運営委員会

本年度も、下記の要領で多田謡子反権力人権賞の候補者の推薦を受け付けます。多数のご推薦をお待ちしています。(これまでの受賞者は当基金のホームページで閲覧できます。)

記

- ・賞の内容 多田謡子の著作「私の敵が見えてきた」および金20万円の贈呈
- ・選考基準 国家権力をはじめとしたあらゆる権力に対して闘い、自由と人権を擁護するために活動している個人または団体
- ・推薦方法 候補者名と活動分野の簡単な紹介を付して、文書で下記住所に郵送、FAXまたはe-mailで送信してください。
- ・推薦締切 2013年9月30日
- ・推薦受付先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16
石田ビル5F 救援連絡センター気付
多田謡子反権力人権基金運営委員会
TEL 03-3591-1301 FAX 03-3591-3583
e-mail web@tadayoko.net
お問い合わせにはできるだけe-mailをご利用ください。

なお、受賞者には受賞発表会での講演をお願いいたします。

本年も12月14日に受賞発表会を開催します。

2013年度の受賞発表会は下記日程で行います。今年もたくさんの皆様のご参加をお待ちしています。(受賞者決定後、詳細をお知らせいたします。)

- 12月14日(土) 午後2時から5時まで。その後同じ場所でパーティーを行います。
- 連合会館201号室 (東京・中央線お茶の水駅より徒歩5分)
(例年の会場・総評会館は連合会館に名称が変わりました。会場は昨年までと同様です)

基金継続のための寄付のお願い

基金では、闘い続ける人々を励まし続けよう、共に闘い続ける意志を表明しようという趣旨に賛同される皆さんからのご寄付をお願いしています。ご送金は下記口座まで。ご寄付と明記の上、お名前とご住所を付して送金して下さい。

【郵便振替口座】 口座番号 00110-2-356484 口座名称 多田謡子反権力人権基金